

金子兜太が亡くなった。98歳だったという。

長く朝日俳壇の選者で、豊原清明さんの投句が金子兜太の目にとまり、多く採用されたこと（百句以上）もあって、豊原さんは句集も出している。

ぼくは短詩型には疎くて、短歌では道浦母都子、俳句では金子兜太の著作しか持っていない。

金子兜太についてはいろんな人がいろんな角度から語るだろうから、ぼくがここで書くことでもないだろうが、金子兜太の詩をきっかけに考えたことをすこし書こうとおもう。

漁業関係者や、貨客船の船員たちの労働組合である『全日本海員組合』が『海員』という機関誌を出していて、ぼくはその機関誌の投稿詩の選者をさせてもらっているのだが、俳句のほうの選者が金子兜太だった。ぼくなどへなちよこな評しか書けないのだが、金子兜太はどこになにを書いても金子兜太だった。三年前の投稿句総評の欄にこう書いている。

「いまの現実」―政府による憲法9条の拡大解釈、つまり「専守防衛」から「集団自衛」への解釈拡大による9条の骨抜き、戦争への道を開く危険な議会操作、そして沖縄の基地としての固執、等々の「危険な現実」に関わる（それへの重大な関心を示す）俳句が無きに等しいほどに乏しかったことが、労働組合の機関誌としては、まことに物足りなかったことを率直に申し上げたい。

と題した400ページ弱の書籍上下二巻本とDVDのセットを刊行している。

あとがきではこう書かれている。

『海なお深く』は太平洋戦争当時の船員の体験手記である。太平洋戦争における兵站としての物資輸送に、十分な警護もない中で従事させられた結果、そのほとんどすべての船舶が撃沈され、そこに乗り組む船員の4割以上が死亡するという悲劇に見舞われた。その率は軍人を遙かに上回り、6万余名の尊い命が海の藻屑と消えた。（略）今日においても、船員がなぜ海上の平和と安全を願い戦争に反対するのか、第二次大戦で多くの船員が戦没した悲惨な体験を、広く国民に知って頂きたい。

投稿詩のなかにも父親の戦死を書き綴ってきた詩があった。臨時徴用された父親所有の船に魚雷が三発あたって船が沈もうとするとき、同乗していた軍人が「聖寿の萬歳を三唱しよう」というのだが、父親は「今更、萬歳でもありませんまい」と拒否して、戦車八台を積んだ船が海没した、という詩だった。

けっこう長いこと選者をやっているのだが、そういう詩はその一篇だけで、あとは海の上での暮らし、家族への思い、そんな詩ばかりで、ときどき、組織や権力などによって人間性が失われていく、といったような詩もあるのだが、そのような詩は、それがそのまま書かれていて、「意見表明」状態になってしまつて詩になつていない。それでもそのような詩は年に一篇

戦時中、トラック島で餓死者があいつぐなか奇跡的な生還をばたし、戦後は日本銀行の労働組合で専従初代事務局長をつとめた金子兜太らしい書きっぷりだ。

ぼくはずうっと個人事業者だったので、会社とか組合とか、そういうことはまったくわからないのだが、小学五年のころ、担任の先生が「キンピョウに行く」といって授業がなくなったことがあった。あとからわかったことだが、あれは教員にたいする勤務評定というものがおこなわれようとしていて、それに反対する教職員労働組合の抵抗行動だった。高知はとくに活発に運動をしていたらしい。あのころ（1957年ごろ）はまだ教師は「労働者」よりも「聖職」扱だったが（先生に叩かれてもそれは、しつけの一環だと親も納得していた時代）、それでも組合活動に教師たちは授業を放棄して参加していた。

JRもそのころは国鉄といっていて、ストライキをよくやっていた。中学校からは汽車通学だったが、組合がストをやったときなどは学校に行かなくてよかった。学校嫌いのぼくにはうれしいストだった。組合にたいしてはそんな昔の記憶しかなく、いまは、連合とかいう大きな組織がある、とだけしか知らないし、どんな活動をしているのかも、もちろん知らない。しかし、「アベ政治をゆるさない」と揮毫する金子兜太にとっては、いまの労働組合の機関誌のありかた、というか、組合員の、「危険な現実」にたいする無関心さに歯がゆさを感じたのだろう。

とはいっても海員組合も自分たちの立ち位置を忘れてるわけではない。昨年七月『海なお深く―徴用された船員の悲劇』

もない。

といっているぼくが、過去の戦争や現在の「危険な現実」についてほとんどコミットメントすることがない。どちらかというと、シニカルに、斜交いに、社会情勢を見ている。なるようになるさのようなことしかおもっていない。個人事業主なので労働条件も賃金も自分次第である。労働環境改善も賃金アップも関係ない。それに、政治的側面を直截的にとりあげた詩は苦手だ。読んでいても主義主張を聞いているといった詩は苦手だ。そういう「意見表明」の場はほかにもあるとおもう。

海員組合の機関誌には毎号「本船の若い人」という紹介記事が載っている。20代前半の船員を紹介しているのだが、そのコメント、最新の2月号では「優しい先輩たちに囲まれて、毎日楽しく乗船しています」「休暇中の楽しみや過ごし方としては、趣味の釣りです」といった言葉が並んでいる。最近の若い人はコンサマトリー化（その行為そのものが目的であり、ただそれだけで欲求が充足するようなこと）しているといわれている。

なにか大きなことにむかっていくのではなく（ぼくらの世代は全共闘世代といわれたが、もののみごとに叩き潰された、あるいは、自滅してしまつた）、身近な友人関係など自分周辺のあれこれを大事にする感覚が若い人たちを支配している、といわれている。（とうぜん社会的な現象に関心を持つ若い人もいるのだが。一時期マスコミに登場していたSEALDsという若い人のグループは印象的だった。しかしそれはうねりにはならなかった）。そんな若い人たちは「格差社会だ」とか「ブラック

企業だ」とか世間が吹聴しても自分の身の回りに支障がなければ、是正運動などおこすこともない。ましてや9条や憲法改正、戦争反対などといわれても。それに9条が破棄されたからといって、すぐに戦争がはじまるわけでもないだろう、と。金子兜太のように先の戦争を体験してきた人たちのように切実感など持ちえようもないだろう。たとえいまが「戦前」だったとしても。

それだけでなくとも、非正規とかで、その日の暮らしがせいっぱいの人たちにしてみれば、頭の片隅に、9条、戦争、あるいは、格差社会だとかブラック企業だとか、サービスマンだとか、とかいう言葉がひっかかっていたとしても、それらにいちいちコミットしてなんか生きてはいられない。自分の身に降りかかってきたらはじめで「それ、おかしいでしょ」ということになる。といつても「それ、おかしいでしょ」と言ったらたん「じゃ明日から来なくていいから」ということになる可能性だってある。そのとき、「それもおかしいでしょ」と言える人と、言えない人がいる。いや、若い人だけではない。日本全体がそうなっているし、そのことをいまいに責めることなど誰にもできない。人は自分の手に余るものをかかえて生きていくことを望んではいないのだから。目の前の理不尽を一手に引き受けて生きていくことなんかできないだろう。「おかしいでしょ」と言える人は言ったらいいし、言えない人は別な生き方を探せばいい。

相対的剝奪、といういいかたがある。人は絶対的な劣悪さの中で労働させられていることよりも主観的な期待水準と現実的

若い人にかぎらず、人は皆、社会的な問題と関わって生きていくわけではない。自分に直接なにかの害が及ばないかぎりすべてが「他人事」である。(たとえば、保育園落ちた日本死ね、ということはある)。だからといって、不満がないわけではない。ちいさな不満はたくさんある。不満はあるが、それをバネになにか行動を起こすほどではない。だから「誰かがそれを解決してくれば、それはそれでラッキー！」ぐらいな感じで毎日を送っている。

金子兜太は機関誌の「俳句の魅力について」というコーナーで、次のように書いていた。ちよつと長いが。

大正時代の初めに、高浜虚子が「俳句は有季定型なり」と規定し、昭和の初めになって「俳句は花鳥諷詠なり」とさらに念を押して以来、俳句と言えは「季語(季題とも言う)」が必須とされるようになり、さらに俳句は自然を詠う詩であると思ひ込む人が多くなつたわけだが、虚子の弟子の中でも四人弟子の一人と言われていた水原秋桜子はこれも昭和の初めに、自然ばかりでなく、「作る人が思っていること(このころの裡)」も俳句に書きたいと主張するようになったことを忘れることはできない。秋桜子は「このころの裡」を「文芸上の真」と書いていました。

この反応は大きく、「新興俳句」運動が盛り上がり、自然ばかりではなく、社会の現実や人間そのものの思っていること、その胸の内も書ける、書きたい、という俳句への期待

な達成水準との格差、いつてみれば、企業が労働者の賃金を低く抑えて利益を得ている、ということよりも、同じ仕事をしている同僚のほうが自分の時給より何百円か多い、といったことに不満を持つ、ということだ。

こういうなかで、労働組合がなにをベースに組合運動を継続すればいいのか。お抱え労働組合(会社と馴れ合いの労働組合。高知のある企業では組合幹部を経験した人が出世していくというシステムをとっている企業がある)もあるなか、9条守れ、戦争反対、と旗を振るだけでは組合員がついてこなくなっているのではないだろうか。

いま、格差社会だ、非正規社会だ、といっているわりに若い人は現状を幸せと感じているらしい。それについて社会学者・大澤真幸は、「いまは不幸だ」といえる時は「いまは不幸だ、将来はより幸せになれるだろう」と考える時だ、といっている。将来の可能性や、これからの人生に希望がある人は「いまは不幸だ」といっても自分を否定することにならないからで、「いまは幸せだ」という人は、自分がこれ以上幸せになれるとおもえないから「いまが幸せだ」というしかない、と。

今日よりも明日がよくならない。だから「優しい先輩」に囲まれて楽しく仕事をしていると自分に言いきかせ、あるいは無意識のうちにそう思ひ込んでしまつて、「趣味の釣り」に軸足を移して生きていく、そんな姿が見えてくるのだが、ほんとうのところはどうなんだろう。個々人、差がある、といえればそれまでだ。

が盛り上がったわけだが、そのポイントは、「季語」ばかりではなく、「詩語(詩の言葉)」はたくさんある。それを、この五七五の詩形で創り出せばよい、というところにあつた。五七五の詩形はその力を持っている。渡辺白泉は次の句を創っている。

戦争が廊下の奥に立っていた(白泉)

十五年戦争の最中にできたこの句の「戦争」は詩語で、季語並み、いやそれ以上の含蓄を持っていたのである。

そんな金子兜太が亡くなった。俳句の世界のことはまったく知らないのだが、先日、関悦史という俳人が新聞に寄稿していた文章をたまたま目にしたことがあつた。彼はこう書いていた。「兜太を欠く俳句界は季定型を絶対視する官僚的な教条主義が、次第に強まつていくのではないかと。季定型を絶対視する官僚的な教条主義とはちよつと時代がかった言い方でつい笑つてしまつたが、もし、そんなふうになつてしまつたら墓の下で金子兜太は齒ぎしりをくり返し、ゆっくり眠れないかもしれない。

金子兜太の句集は一冊しか持っていない。それも昭和56年(1981年)に出された『金子兜太全句集(立風書房)』という古いもの。彼の句は、生命力豊かなリズムが特長だとおもう。言葉とイメージとリズムを前へ前へと押し出すことで、表現の肯定性を印象付けているのが魅力的だ、と門外漢の感想。

『全句集』のなかの第一句集『少年』から印を付けていた句

をいくつか。なお、『少年』の後記はこう結ばれている。「最後に、そして何よりも、自分の俳句が、平和のために、より良い明日のためにあることを願う。」どこになにを書いても金子兜太だとあらためておもう。

わらんべの蛇投げ捨つる湖の荒れ  
誕生日飯食い始む星座の前  
赤錆の浮標とおのれの炎天下  
水脈の果炎天の墓碑を置きて去る  
死にし骨は海に捨つべし沢庵嘔む  
墓地は焼跡蟬肉片のごと樹樹に  
熱した街臭早くも雨後の眉間にくる  
裏庭蒼い銀行の夕暮を持ち帰る  
少年一人秋浜に空気銃打込む  
焼跡照らす艇の主婦の火猛猛し

俳句のことをおもうとどうしてもロラン・バルトの言い分が気になってしまう。フランスの思想家で日本文化に興味を持っていたロラン・バルトは日本体験記『表徴の帝国』(新潮社・1974年)のなかで、俳句についてこう書いている。

俳句において、言語に見切りをつけるということが、わたしたち西洋人の思い描くこともできない重要な関心事なのである。意味が溶けることがない、内在化することがない、にじみでることがない、はずれでることがない、暗喩の

ることではないのだから。芭蕉はその企てがどんなにむずかしく、しかもどんなに必要であるかを見事に心得ていたと、と次の句をあげている。

なんと素晴らしい人であることが、  
稲妻を見て、

「生はかかないものだ」と思わぬ人は！

(稲妻にさとらぬ人の尊さよ)

彼の言っていることは簡単に言えば、西洋が「意味の国」であるのたいして日本は「表徴(記号)サイン(しるし)の国」だ。

西洋の文化が意味を満たそうとするのたいして、日本の文化は意味の欠如をとまう、あるいは、意味で満たされることを拒否する文化だということである。

たとえば、寺などにある『石庭』について、「どんな花もない、どんな足跡もない。人間はどこにいるのか？ 岩石の搬入のなかに。箒の掃き目のなかに。つまり表現体の動きのなかに、い。」と言っている。それは先に引用した俳句論にそのまま通じる。

ロラン・バルトの俳句にたいする考え方は金子兜太とは正反対のようだ。金子兜太は、書きたいことはきっちり書く、と言っているのたいし、ロラン・バルトは内部に空洞を抱えている。日本文化としての俳句のありかたがすばらしい、と言っている。まあ、日本文化の見方としてはそうなのかもしれないなあ、と

無限、象徴の気圏のなかにさまよいでることがない、こういうことを実現するために、たいせつなのは簡潔であること(つまり意味されるものの濃密を減少させることなしに、意味するものを要約すること)ではなくて、逆にその意味の根源そのものに働きかけることなのである。俳句の簡潔さは形式のためのものではない。俳句は短い形式に還元された豊かな思念ではなくて、一挙にその正当な形をとった短い終局なのである。

そして、芭蕉の句「こ、のたび起きても月の七つかな」を取りあげてこう言っている。

すでに四時：

わたしは九回起きたのだ

月を賞でるために

(こ、のたび起きても月の七つかな)

西欧での解釈の道は意味を突き通す、つまり家宅侵入することで意味を挿入することを目指している。《公案》(禪の祖師達の具体的な行為・言動を例に取り挙げて、禪の精神を究明するための問題)『大家註』を前にして超理性性を咀嚼しなおしている禪僧の歯のように、意味をゆさぶって抜け落ちさせることを志向していない。ひたすら読解と構造分析を同語反復をくりかえすだけであって、ついに俳句を把握するにいたることがない。俳句の読解の企ては、言語を宙吊りにすることであって、言語を喚起す

なんとなく納得して読んだことだったが、次のような言いかたをされるとすこし「？」がついてしまう。

日本が内部に空洞を抱えているということの例としてロラン・バルトは、西洋では都市の真ん中には精神性としての教会(聖堂)、権力性としての官公庁、言語性としての広場やカフェがあるのたいして、日本の都市の真ん中には皇居という禁域があつて誰からも見られることのない皇帝が住み、そのまわりを東京という都市の全体が巡っている。この中央は西洋の中央のように、なんらかの力を發揮するためにそこにあるのではなく、都市のいつさいの動きに空虚な中心点を与えていて、そんなふうに、東京の中心は「空虚」である。空虚な主体にそつて、非現実的で想像的な世界が迂回してはまた方向を変えながら、循環しつつ広がっている、と都市の中央という意味から解放された日本の自由さを肯定している。

そんなふうにフランス人のロラン・バルトは言っているのだが、日本人のぼくとしては、空虚な中心はほんとうは「空虚」なんかではない、とおもっている。

高知という日本の端っこから、平成終わりの騒動を見ていると、都市の真ん中には西洋の聖堂以上の意味合いがあり、記号として隠されているのだとおもわずにはいられない。その、一見「空虚」にみえる場所は、多くの人が精神性、権力性、言語性をあやつるものとして利用している。